

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 7 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2012

課題番号：21520511

研究課題名（和文） 日英語談話における、統語・情報・韻律構造の比較研究

研究課題名（英文） A Comparative Study of Syntactic, Informational and Prosodic Structures in Japanese and English Discourses

## 研究代表者

熊谷 吉治（KUMAGAI YOSHIHARU）

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号：20242745

研究成果の概要（和文）：談話における新情報の導入様態や、文の構造と発音の構造の関係に着目し、同一タスクによって収集された音声言語資料の分析を通して、日本語と英語の類似点や相違点を明らかにした。新情報の担う文法関係は日英語とも類似した傾向が見られたが、新情報を伴う名詞句の構造や導入のされ方は、日英語で違いが見られることがわかった。文法構造と音調構造の関係は、両言語の語順の違いに着目しながら分析と調査を展開・継続している。

研究成果の概要（英文）：The aims of this research project are to clarify some similarities and differences in Japanese and English narrative discourses, in terms of the manner of new referent introduction and on the relation or discrepancy between the grammatical structure and the intonation structure of spoken clauses. The analyses are based on the narrative data collected through the same task. It has been made clear that both languages exhibit similar tendencies in terms of the preferred grammatical categories of new referents, but there are some differences in the manner in which new information is introduced. As for the relationship between grammatical and intonation structure, acoustic analyses are in progress with special attention to word order differences in both languages.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文科学

科研費の分科・細目：言語学、英語学

キーワード：文体・談話分析

## 1. 研究開始当初の背景

日本語と英語は表層的な形式に違いがあるが、同一の経験に基づいた談話であれば、意味や情報構造、言語化の動機（何に着目し、言語化するか）には類似性が存在すると考えられる。Du Bois が提唱する優先的項構造理

論は、新情報の現れ方と文構造に着目し、多くの言語で「一つの音調単位内に収容できる新情報は多くて一つ」であり、「新情報を主語に置くことは稀である」ことを示した。

申請者は独自に、話者が短編映画のあらすじを語った資料（日本語女性話者 15 人分と

英語女性話者 20 人分) を調査し、上述の二つの傾向を確認したが、新情報の分布様態の細部には日英語で差異が見られた。

さらに申請者による別の準備的研究によって、日本語独特の特徴が見えてきた。日本語では新情報をいきなり主語や目的語に導入することはほとんどない。新情報はまず、漠然とした指示表現によって導入される。続いて、聞き手の反応を確認しつつ指示物の意味内容を明確にしながらか別の文で動詞の主語に導入するのが普通である。

一方英語では、複雑な名詞句を用いて主語以外の項位置にいきなり新情報を入れる傾向が強かった。このような日英語の形式上の変異がどういう要因と結びついているかはまだ十分解明されていない。

日本語話者は聞き手を意識して談話を展開する傾向が強いが、それは日本語談話における音声上の切れ目の多さにも関連している。日本語は命題内容を「文」という単位で一度に提示せず、文をより小さな単位に分け、意味の固まりごとに頻繁にポーズを置きながら意味内容を伝える傾向が強い。このことも、申請者による準備的研究で裏付けられた。

一方、英語では、文的意味を単一の音調単位で表現する傾向が強い。日本語における断続的な意味・情報提示と音調単位の分断現象についての先行研究は多いが、同一の経験に基づいた言語資料を使った日英語の比較研究は行われていない。英語との比較を通し、日本語における音調単位の分断が恣意的なのか明らかにする必要がある。

## 2. 研究の目的

同一の経験を英語や日本語に言語化した発話における形式上の変異と、各言語の内部構造や情報構造、話者の個人差、性差、言語差との関連、時代による変異について、*Pearl Film* という無声映画に基づいた一人話りの日英語談話資料を用い、とりわけ新情報を伴う名詞句に着目しながら実証的に解明する。

## 3. 研究の方法

次のテーマに焦点を絞って実証的調査を行い、英語論文の公刊と口頭発表を通して研究成果を公表する。

(1) 新情報が導入されやすい位置に日英語で差はないか。

(2) 新情報名詞句の内部構造の複雑さに日英語で差はないか。

(3) 新情報を伴う表現の言い換えや訂正が行われる頻度に日英語で差はないか。

(4) 新情報を含んだ文と音調単位の対応関係について日英語で差はないか。

(5) 新情報を含んだ文を複数の音調単位に分断する傾向の強さは、日英語の語順の違いを反映していないか。

(6) 同一タスクに基づいて収集した資料で、時代による言語構造の変化がみられるか。

## 4. 研究成果

論文①によって、研究目的の(1)から(3)に関わる英語の調査結果を英語で公刊した。英語談話における新情報の現れ方、新情報が導入される表現の内部構造、記号化の難易度と構造との関係を明らかにした。

論文③および④、さらに学会発表①を通して、米語談話における関係詞節の性質を調査した。文内で関係詞節の現れる位置や、新情報を伴う先行詞が関係節とどのような文法関係を持っているかを調査した所、ナラティブ談話における関係詞節の分布に男女差はないこと、主節の文末位置にある名詞句が関係節化されやすいこと、先行詞は関係詞節内で主格として機能する傾向が強いこと、そして主格と目的格の関係詞節の比率は男女とも4:1である事を明らかにした。

文構造が単純な文体では、主格と目的格関係詞節の頻度差が大きくなる傾向を見いだしたが、会話における関係詞節の分布は他のジャンルとは異なり、主格と目的格関係詞節の比率が1:1に近いことが、FoxとThompsonの研究で指摘されている。しかし、この違いは会話内で主節や関係詞節に現れる人やものの種類の違いに起因することがわかった。

会話では“I”や“you”といった発話行為参加者の出現する比率が高く、そのために他の文体とは異なる分布が見られる事を実証した。

論文⑤は、日本語談話における新情報名詞句の導入の様態を分析し、論文①で調査した英語の発話プロセスとの違いや類似点を明らかにしたものである。

データ分析を元に日英語とも主語位置への新情報の導入を避けることを明らかにした。

英語においては、記号化が困難な事物や、逆に記号化する手段が複数存在するような事物を導入する場合に、通常と異なる新情報の導入方法が用いられやすい。ところが日本語ではこのような一貫した傾向が見いだせなかった。日英語とも、同じタスクに基づいた言語資料であるが、異なった言語使用の姿を浮き彫りにした。

研究テーマ(1)から(3)のうち、特に英語の研究結果を総括して海外での学会発表に応募した(学会発表②)。当該研究は査読を経て、2013年9月に開催される第13回国際語用論学会(於インド・ニューデリー)での口頭発表が正式に決定した。これにより、科研費の研究成果の一部を国外で広める機会が得られることになった。

なお、上述の研究テーマに基づいて言語分析を行った過程の中で、新たな関連課題も見えてきた。論文②では、同一タスクの談話における時制の交替現象を調査した。それにより、米語母語話者の65%がほぼ一貫して現在形で過去の経験を語っていたが、25%は「過去→現在→過去」のように、時制を途中で何度か変更することがわかった。

研究テーマの(4)から(6)については、現在言語資料の収集および分析が進行中である。収集したデータの分析と成果発表にさらに時間を要するため、継続的・展開的研究として新たに科研費に応募する予定である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① Kumagai, Yoshiharu. Some Remarks on Less Rigid Introduction of New Referents in Spontaneous English Narrative Discourse. *Mulberry* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集). 査読無. 第59巻. 2010年. pp. 45-61.
- ② Kumagai, Yoshiharu. Choice of Tense in Relative Clauses: A Case Study of Tense Variations in the *Pear Film* Narratives. *Mulberry* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集). 査読無. 第60巻. 2011年. pp. 13-31.
- ③ Kumagai, Yoshiharu. Relative Clause in Narrative and Conversation: Properties of Head NP and Preferred Clause Types. *Mulberry* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集). 査読無. 第61巻. 2012年. pp. 45-66.
- ④ Kumagai, Yoshiharu. Remarks on Relative Clauses in English Conversation: Relevance of Speech Act Participants to Preferred Clause Types. 『愛知県立大学外国語学部紀要(言語・文学編)』. 査読無. 第45巻. 2013年. pp. 83-96.
- ⑤ Kumagai, Yoshiharu. Aspects of New Referent Introduction in Japanese Narrative Discourse: Details of Processes and Differences from English. *Mulberry* (愛知県立大学外国語学部英米学科論集). 査読無. 第62巻. 2013年. pp. 43-59.

[学会発表] (計2件)

- ① 熊谷吉治. 「話し言葉」の文体: 英語関係詞節の分布から考える. 愛知県立大学高等言語教育研究所主催言語研究会. 2012年2月29日. 愛知県立大学.

- ② Kumagai, Yoshiharu. Manner of New Referent Distribution in the Narrative Discourse within its Temporal Structure and Context Space. 第13回国際語用論学会(International Pragmatics Association)年次大会. 2013年9月発表決定. インド・ニューデリー.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計0件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等  
該当なし

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 吉治 (KUMAGAI YOSHIHARU)

愛知県立大学・外国語学部・准教授

研究者番号: 20242745

(2) 研究分担者

( )

研究者番号:

(3) 連携研究者

( )

研究者番号: